

オーストラリアの野生化スイギュウ

高橋 春成*

Feral Buffalo in Australia

Shunjo TAKAHASHI

I はじめに

動物地理区からみた場合、オーストラリアは単孔目や有袋目で代表されるオーストラリア区に含まれる。しかし、1788年にヨーロッパ人による入植がはじまって以来、外部から有胎盤類に属する多くの有蹄家畜が導入されてきた。これらの家畜の一部は、その後種々のいきさつより野生化し、在来の動物相のなかへ侵入している。

野生化した家畜は、今日在来の生態系や人間の経済活動に被害をもたらす存在となっている。その点で、本稿でとりあげる野生化スイギュウは野生化ブタと並んでオーストラリアを代表する野生化家畜である。

本稿では現地調査や文献類などから得た情報を整理することにより、野生化スイギュウの分布と発生過程、有害性と有益性、コントロールの問題についてみていく。

II 分布と発生過程

野生化したスイギュウ(写真1)は、オーストラリア北部の熱帯の環境下に適応をとげている。野生化したスイギュウが生息するアーネム・ランド周辺は、サバナ気候下であり雨季と乾季がみられる。彼らは沿岸部の湿原、河川沿いの氾濫原、ユーカリの疎林などで、草本類、樹木や灌木の葉や茎、水生植物を食料として生活している(Tulloch, 1986)。

オーストラリアで野生化したスイギュウの原種は、インド、ネパール、スリランカ、インドシナ半島などに生息しているアジアスイギュウである。家畜化されたアジアスイギュウは、熱帯や亜熱帯の湿潤地域で農耕用として使役されてきた。

オーストラリアへのスイギュウの持ち込みと野生化の経緯を、Letts (1964)、McKnight (1976)、Tulloch(1979)、Lever(1985)などを整理することによって検討すると次のようになる。

オーストラリアに最初のスイギュウが導入されたのはメルビル島に建設された軍の駐留地で、1826年のことであった。メルビル島は、オーストラリア大陸周辺の島ではタスマニア島に次いで2番目の広さをもつ島である。

これらのスイギュウは食料用や使役用としてチモール島より搬入された。しかし、メルビル



写真1 野生化スイギュウの群れ (1987年9月)

島の駐留地は3年後に放棄され、その折に一部のスイギュウが遺棄された。その結果、同島でスイギュウの野生化が発生したとされる。

1828年には、オーストラリア本土のコバーク半島に建設された軍の駐留地にもチモール島やメルビル島からスイギュウが導入された。当地でも軍の移動があり、一部のスイギュウが逃亡したり遺棄されて野生化した。コバーク半島では、1849年に別の駐留部隊が解散された時にもスイギュウが遺棄された。

このようにして遺棄されたり逃亡したスイギュウの野生化群は、19世紀後半にはノーザン・テリトリー北部のメルビル島やアーネム・ランドに確固とした生息地を獲得するにいたった。

当時オーストラリアの北部に持ち込まれたスイギュウの総数は200頭にみえず、その内の20～50頭が遺棄されたり逃亡したにすぎなかったといわれる。しかし、野生化したスイギュウはその後繁殖し、1985年当時の推定生息数は35万頭に達した (Baylis and Yoemans, 1989)。

熱帯や亜熱帯の環境にすぐれて適応力のあるスイギュウがオーストラリア北部のサバナ気候下の土地に導入された背景は理解できるが、一部の野生化したスイギュウがこれほどまでに繁殖するとは誰も予想しなかったにちがいない。

近年アーネム・ランドでは駆除によって野生化したスイギュウの生息数は著しく減少しているが、メルビル島やアーネム・ランドの一部には今なお野生化スイギュウの群れがみられる。

野生化したスイギュウは、雌とその子で構成される数頭から30頭ほどのグループで生活している。雄の子スイギュウは2～3歳でグループから追われる。雄は単独でいるか雄だけの群れを形成し、雌が発情期をむかえる雨期に雌のグループに合流する。雌は4歳で初産をし、20歳ぐらいまで出産する。

野生化したスイギュウの子や衰弱した成獣はディンゴやワニに捕食されることもある。しかし、当地には原種のアジアスイギュウが生息する地域にみられるトラのような強力な捕食者がいない。また、野生化スイギュウを脅かすような病気も少ない。そのため、人間によるコントロールがない状況では生息密度がきわめて高くなる。

乾季が長引いたり乾季の雨量が少ないシーズンには、水や食料が不足することからかなりのものが死亡するとはいえ、このような野生化スイギュウはこれまでオーストラリアの熱帯を代表する野生化動物となってきた。

Ⅲ 有害性と有益性

人間の手によって持ち込まれ、人間の手を通じて野生化した家畜たちは、新たな環境のなかで彼らの生をまっとうし種を維持していこうとする。この当然ともいえる行為は、在来の生態系や人間の経済活動などに有害な結果をもたらすことが多い。そのため野生化した家畜は害獣のレッテルをはられることが多い。

また一方で、野生化した家畜は狩猟の対象や観光の目玉商品などとして活用されてきた。今日野生化した家畜は有害性と有益性の2面性をもった動物として、在来の生態系や人間活動に多大の影響を与えている。

(1) 有害性

①在来の生態系への有害性

野生化したスイギュウは食害、踏みつけ、体のこすりつけによって湿地周辺の淡水性の在来植生や熱帯雨林の幼木・成木などに被害をもたらしてきた。

特に干満の差の大きい沿岸部では、野生化スイギュウの活動によって掘りこまれた小道に海水が侵入し、広い範囲の淡水性のペーパーパークの湿地が破壊されてきた。

写真2は、カカドゥ国立公園内のペーパーパークの湿地である。このような湿地は、オーストラリアヅル(写真3)、カササギガン、ベリカンなど多くの鳥類の生息地となっている。



写真2 ペーパーパークの湿地(1993年7月)



写真3 オーストラリアヅル(1993年7月)

オーストラリアヅルは軟体動物や昆虫なども食べるが、主として湿地の塊茎類を食料としている。カササギガンもまた湿地の草の実や塊茎類を食料としている。したがって、海水の侵入による広い範囲の湿地の消失は在来の動物にも多大の影響をもたらしている。

②人間の経済活動への有害性

また野生化スイギュウは、オーストラリア北部のウシ産業にとって招かれざる立場にたたされている。まず、野生化スイギュウは放牧ウシと牧草をめぐって競合する。

Letts *et al.* (1979)は、推定される15万頭の野生化スイギュウによって同数のウシが排除されており、これらのウシからの潜在的な年間収入を見積ると450万オーストラリアドルにのぼるとしている。”

さらに、野生化スイギュウは牛結核の保菌者となるため、アメリカや日本に牛肉やスイギュウ肉を輸出しているオーストラリアの牧畜関係者の関心は高い。また、野生化したスイギュウはウシマダニの潜伏場所やレプトスピラ症などの宿主となったり、口蹄疫の潜在的な媒介者にもなっている。

口蹄疫は、オーストラリアの牧畜関係者の最大関心事の1つである。口蹄疫は口粘膜や蹄の間の皮膚などに水泡を生じる家畜の法定伝染病で、ウシ、ヒツジ、ヤギ、ブタなどに伝染する。この伝染病は現在オーストラリアにみられないが、ひとたび国内の家畜間に伝染した時の損害は年間に25億オーストラリアドルにのぼるだろうと見積られている (Johnson, 1982)。

(2)有益性

近年では野生化スイギュウを害獣視する傾向が強まっているが、アーネム・ランド半島周辺の野生化スイギュウは古くから活用されてきた。

Letts *et al.* (1979)によれば、1885年に皮の収穫を目的とした野生化スイギュウの狩猟がはじまる。その後1911年までの間に、10万枚もの皮が海外に輸出されたといわれる。皮革を目的とした狩猟は、その後皮革産業が衰退する1956年まで続く。

1885年から1956年に至る70年間に収穫されたスイギュウの皮の総数は39万枚にもものぼり、これらの多くはイングランドとトルコに輸出された。野生化スイギュウの皮の収穫が衰退したのは、加工された皮の低品位性が主原因であった。

1959年以後になると、皮革の収穫にかわって肉の収穫がはじまる。1959～60年には2500頭の野生化スイギュウが捕獲され、400t (骨抜き)の肉が収穫された。

肉利用はその後も増加し、1965年には野生化スイギュウの屠場が8ヶ所にみられるようになった (Tulloch, 1986)。1975年にはヘリコプターによる寄せ集めも行われ、捕獲されたスイギュウの肉は西ドイツやスウェーデンに獣肉として輸出された。また、野生化スイギュウの肉はペットフードとしても利用されてきた。

オーストラリアでは、野生化スイギュウの再飼育もみられる (写真4)。たとえば、1958年にはマラカイとウールナーの牧場で、捕獲された400頭以上の野生化スイギュウが再飼育された。同年には屠殺用として生体のスイギュウがはじめてホンコンに輸出された。

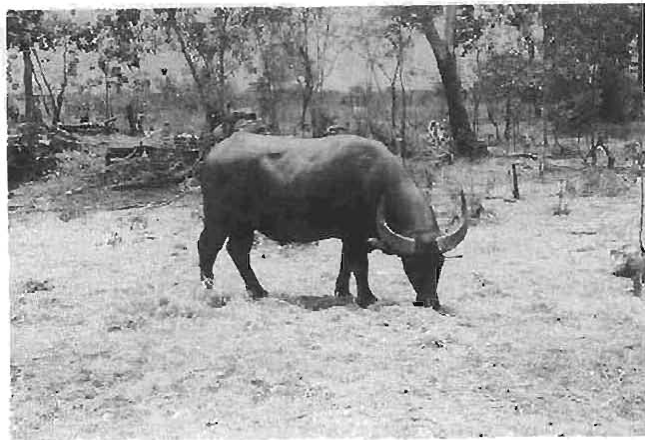


写真4 野生化スイギュウの再飼育 (1987年9月)

また1975年には、アデレード川付近の土地が海外向け用スイギュウの再飼育用地として当局から貸借され、飼育用としてベネズエラ、ガイアナ、ナイジェリア、ニューギニア、インドネシア、屠殺用としてマレーシアなどにスイギュウが輸出されてきた (Tulloch, 1986)。

皮や肉の利用以外に、野生化スイギュウは観光資源としても活用されてきた。近年成長をみせる観光産業のなかで、野生化スイギュウは“熱帯の猛獣”というキャッチフレーズで、アーネム・ランド半島周辺の観光の目玉商品の1つとなってきた。

当地を訪れる観光客は、カメラサファリや狩猟サファリを通して、熱帯の環境下に野生化しているスイギュウの醍醐味を満喫してきた。また、このような観光産業の成立は、就業機会の少ないノーザン・テリトリー北部の住民 (アボリジニを含む) に現金収入源の道を拓いてきた。

IV コントロール

オーストラリアにおける野生化スイギュウへの対応を概観すると次のようになる。前述のように1885年当時には相当数の野生化スイギュウがみられるに至ったが、その後1911年にかけて多数が皮の収穫のために捕獲されたことから生息数は減少した。そこで、ノーザン・テリトリー当局は1939年にスイギュウ保護令 (Buffalo Protection Ordinance) を発令し、野生化スイギュウの狩猟をライセンスの発行のもとに規制するようになった。これは、当局が野生化したスイギュウを生物資源とみなしていたためである。

オーストラリアで野生化スイギュウに対する見方に害獣視的傾向がでてくるのは1965年頃とみなすことができる。それは、1957年にスイギュウ保護令の名称がスイギュウ・コントロール令 (Buffalo Control Ordinance) に変更されたことからもうかがえる。

スイギュウ・コントロール令はその後1964年に廃止され、かわって野生動物の保護並びにコントロール令 (Wildlife Conservation and Control Ordinance) が発令される。

これによって、スイギュウの保護地区 (buffalo area) が区分された。ここでは、ライセンスの発行のもとに狩猟や生体捕獲に規制をもたせ、この地区のスイギュウに限って1975年以前は野生動物 (wildlife)、以後は生物資源 (stock) と公的に位置づけてきた。保護地区とされたものの、いわばこの地区はスイギュウの有益性を活用する地区であり、長期にわたって収穫が持続できるように規制が加えられたのである。

一方、当地区の外側におけるスイギュウの公的位置づけは害獣 (pest) とされた。ここでは、害獣指定されたスイギュウが規制のないままに駆除や搾取の対象とされた。

1979年にノーザン・テリトリーの野生化動物調査委員会は、当地に生息する野生化動物の調査結果 (多くは野生化スイギュウについてのもの) を公表した (Letts *et al.*, 1979)。

このなかで、同委員会は国立公園や鳥獣保護区などの在来生態系保護の重点地域からは、実施できるかぎり野生化スイギュウを排除すべきであると指摘した。また、野生化スイギュウによる熱帯雨林への影響も取り除く必要があるとした。

さらに、野生化スイギュウの生息地の拡大を阻止すること、保護地区内やそれと近接して観光用や食用としてスイギュウが保持されているようなところでは柵を施すなどの適切な措置が必要であることを指摘した。

カカドゥ国立公園では、このような方針にしたがって野生化スイギュウの排除作戦が展開され、当公園内からの野生化スイギュウのしめだしが実行された。

1979年から88年にかけて、当公園から約8万頭の野生化スイギュウが駆除された。コントロールの内訳は、生け捕り約4.3万頭、ヘリコプター上からの銃殺約2.8万頭、地上での銃殺約8000

頭であった。

さらに1985年以降は、大規模なブルセラ症と牛結核の根絶キャンペーン (National Brucellosis and Tuberculosis Eradication Campaign) のもとに、野生化スイギュウの駆除が展開されている。

このようなコントロール強化の背景には、在来の生態系への被害やウシ産業に対する被害を取り除くといった目的がある。そして、今日の高まる害獣視のなかで、古くは皮の収獲源、その後は肉の収獲源や観光資源として地域経済の一翼を担ってきた野生化スイギュウの貢献史は片隅に追いやられようとしている。

V おわりに

野生化したスイギュウをはじめオーストラリアにみられる多くの野生化家畜たちの先祖は、かつてオーストラリアの開拓時代に家畜として華々しい活躍をした。しかし、それらの子孫たちには“害獣”のレッテルがはられ、オーストラリアからの駆逐が叫ばれている。

開拓時代の頃、多くの人々は、飼育の粗放性や解き放ちなどによって離脱していったスイギュウたちがその後大いに繁殖し、後世に種々の問題を残すことになるとは想像しなかったにちがいない。

我々はこのようにして生じてきた野生化スイギュウによる在来の生態系や人間活動への影響を、今後のいわゆる環境問題を考えていく上での一つの教訓とする必要がある。そうすることによってはじめて、人間の手によって翻弄されてきた野生化スイギュウたちも浮かばれよう。(本調査は、主として1987年、1990・91年度豪日交流基金の助成により行った)。

注

- 1) 一方、オーストラリア北部のスイギュウからの収入は350万オーストラリアドルとされている。

文 献

- Baylis, P. and Yoemans K.M. (1989): Distribution and abundance of feral livestock in the Top End of the Northern Territory 1985-86 and their relation to population control. *Australian Wildlife Research*, 16, 651~676.
- Johnson, J. (1982): *Exotic animal disease emergencies in the Australian Grazing Sector-an economic study*. Australian Bureau of Animal Health, Canberra, 36p.
- Letts, G.A. (1964): Feral animals in the Northern Territory. *Australian Veterinary Journal*, 40, 84~88.
- Letts, G.A., Bassingthwaite, A. and de Vas, W.E.L. (1979): *Feral animals in the Northern Territory*. Government Printer of the Northern Territory, Darwin, 234p.
- Lever, C. (1985): *Naturalized mammals of the world*. Longman, New York, 487p.
- McKnight, T. (1976): *Friendly vermin: a survey of feral livestock in Australia*. University of California Press, 21, Berkeley, 104p.
- Tulloch, D.G. (1979): Redomestication of water buffaloes in the Northern Territory of Australia. *Animal Regulation Studies*, 2, 5~20.

Tulloch, D.G. (1986): The water buffalo: pest or future domestic animal? Kitching, R.L. (ed.): *The ecology of exotic animals and plants*. John Wiley and Sons, Brisbane, 78~90.

Summary

The buffalo was introduced first to Melville Island from Timor in 1826. In 1828 buffalo were introduced to Cobourg Peninsula from Timor and Melville Island. They were introduced as potential food and beasts of burden. However, later some buffalo were released and escaped when settlements were abandoned.

By 1885 feral buffalo were well established. Feral buffalo are most common on the flood plains of the Top End of the Northern Territory. In 1985-86 the numbers were estimated at 350,000.

Like many feral animals, feral buffalo has positive and negative aspects. Feral buffalo has provided a source of meat and skins for commercial utilisation, a tourist attraction and a source for buffalo farming.

Buffalo, however, compete with cattle for food and spread livestock diseases such as tuberculosis. Further feral buffalo damage flood-plain environments. Channels formed by buffalo have resulted in the intrusion of saltwater into fresh water swamps with subsequent loss of original vegetation. In Australia, recently feral buffalo have been controlled on a large scale to eliminate negative aspect.